

---

# ジハード

みかど

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジハード

### 【Zマーク】

Z2888W

### 【作者名】

みかど

### 【あらすじ】

この世界を闇に覆わんとした魔王が居た。だが勇者は見事魔王を討ち倒す・・・そして囚われの幼い少女を見つけた。言葉を失った少女は王国の養女となり、心に密かな決意を抱く。 王子と姫の恋物語では全く無いのでご注意を。

## 序章

周囲四方を囲む石壁に縫ぎ田は無く、一枚の石で造り上げられて  
いる。傷の一つも無い。

堅固にして重厚な広間は痺れそうな緊張感と魔力の余波に包まれ  
ていた。

「滅びるがいいつ！！」

叫びと共に振り下ろされた剣から雷光が迸る。  
田を覆う光の奔流とそれを？み込まんとする虚無の闇がぶつかり  
合った。

う、るうるぐ・・う、う・・・・！

地獄の底から響くよくな呻き声が聞こえ、剣を握る男に闇が迫る。  
「闇、などに・・・闇などに、人は負けぬ・・・っ！」

振り下ろしていく劍を再び天に掲げ、呪語を紡ぐ。

彼を劍を芯として、ぼんやりとした光があふれ・・・それはやが  
て田を覆わんばかりの輝きとなつた。

輝きは苛烈な光の刃となり闇を切り裂いていく。

やがて静けさと少しばかりの薄暗さを取り戻したその広間に立つ  
ていたのは剣を掲げた男。  
そして。

零れ落ちそうに田を見開き、太い柱にしがみ付く幼い少女だった。

.....\* \* \* \* \*

わああと地響きせんばかりの歓声が彼等を包む。

街の大通りを馬に乗つて行進しているのは、魔王討伐を果たした勇者の一<sup>つ</sup>だつた。

「イルシオン殿下万歳！！」

「我らが帝国に栄光あれ！」

先頭を行くのはこの国の皇太子であり、最大の功労者でもある。長い旅路と戦いの激しさを思わせるくたびれた外套を纏ついていても、光の勇者と称えられたその姿は万人が平伏さずにはいられない霸気に満ちていた。

その王子の腕の中には大衆の歓声の声も聞こえないように無表情で前を向く幼い少女が座つている。

王子は観衆の声に穏やかに笑顔を返しながら、出来るだけ馬が揺れないようにと気を遣いながら王城の門を潜つた。

「お帰りなさいませつ！殿下！！」

「よくぞお戻り下さいました！！

「さあさあ陛下がお待ちです！」

馬から下りるや方々から声が掛けられる。

「わかった。…すまぬが誰かこの子供をアーネのところへ連れて行つてくれぬか？」

「…・子供？」

見れば王子の足元にフードを被つた小柄な人物が立つている。

「ああ。魔王の城に囚われていたのだ」

「つ何と…！」

「心に傷を負つていいようで言葉がしゃべれぬ

「何と憐れな・・・畏まりました。殿下、私が責任を持つてアーネのところへ連れいたしましよう」

初老の男は頷き、子供と目線を合わせるよつこじやがんだ。

「子供よ。殿下は大変お忙しい身、代わりに私がお前をアーネという者のところへ案内する。なあに心配はいらぬ。アーネというのは殿下的乳母もしておつた者ゆえな

子供は依然として何の反応も無いが、初老の男はお構いなしだ。

「それでは殿下、この子供は私にお任せ下さい

「頼んだぞ」

王子は一度子供に気遣わしげな視線を投げかけた後、城内に向かつて去つていった。

「さて行くぞ。・・・色々と酷い目にあつたのだろう。ゆっくりとここで心を休めるが良い

やはり何の反応も示さない子供の傷の深さに初老の男は眉を顰め手を差し出した。

「さあ手を。城内は広い。迷つてはいけぬからな

子供はその手をじつと見つめた。

もしや言葉がわからないのかと思い始めた時にそろりと小さな手を乗せてきた。

男は顔を綻ばせた。



宮殿内は静かだった。

特にこの離宮は王族とその世話をする者しか出入りすることができないので特に。

「姫様

雲一つ無い青い空を広く開かれた窓から見上げていた少女が振り返った。

華美では無いが上質のドレスを身に纏い、結い上げることが礼儀とされる髪を背中に流している。

しかし誰もが「はしたない」と眉を潜めるよりも、その艶のある黒髪にうつとりと田を細めるだろう。

何より少女は幼くとも後の美しさを確信させる容貌で、惜しむらくなは抜け落ちたような表情の無さが全体に影を落としている。だがそれさえも、彼女の生い立ちを知れば然にあらんと同情と憐憫を寄せるだろう。

「本日は良いお天氣でございますね。庭にお出でになりますか?」  
こちらはショーンキャップで髪をきつちじと纏め、女官に支給されるエプロンドレスを身に纏っている。

柔軟な笑顔は反応の薄い少女に気にすることなく向けられている。少女は少し考えたように動きを止め、首を横に振った。

「まあ。それでは本日も図書室に行かれますの?」  
「こくんと少女が頷く。

「本当に本がお好きなのですねえ。シーラ様は」  
そう言われた少女は一拍置いて頷いた。

「ですがお昼にはお戻り下さいね」

「・・・?」

「本日は殿下がお渡りになるとのことですから、やはりそれにも表情を変えず少女は頷いた。

表情を翳らせたのは女官のほうだった。

「殿下・・・兄君様はシェーラ様がご心配なのですわ」己の義妹という立場になつた少女のことを、兄王子はとても心配し、心を碎いていた。

言葉を返せない少女に苛立つことなく相手をし、不便は無いかと忙しい中離宮まで足を運ぶ。

「姫様がこちらにいらしてもう一年。早いものでござりますわ」しみじみ呟いて女官は朝食を片付けて行く。

その様子を少女はやはり表情を変えず見つめていた。

\* \* \* \* \*

離宮に併設されるように建てられている図書館は5代から6代か前の王が書を好む妃のためにと建てたものだ。そのためごく限られた者しか出入りしないが所蔵数も多く、ここにしか無いような貴重な本も置かれていた。

その図書館の更に奥の部屋で少女は熱心に本に目を通していた。手にある本のタイトルは『属性魔法 火の章』。

中級レベルの火属性の魔法について詳しく書かれた教本だった。火属性といえば、主な魔法は攻撃魔法となる。少女が興味を示して読むには少々物騒だった。

「・・・・・」

活字を真剣に追っていた少女は小さく溜息をつく。

静かな部屋では小さな溜息も大きく響く。

『魔と起源』、『初步的魔導書』……などなビジ女の傍らにては魔法関係の書物が重ねられている。

この国では魔法を使える者といつのは珍しくは無い。庶民でも生活に使いこなすとした魔法は使うことが出来る。

それ以上のことを知りたければ王立の魔導学校へ行くことになつている。

魔導の才能があると認められれば庶民も通うことなどが可能だ。伊達に近隣随一の大國の看板を掲げていなし。まして魔王を討伐した勇者を王子としているのだから。

少女の握り締められた小さな手が震えている。

本を傷めなすことなく切つとられた窓から見える塔を見つめた。

そこは禁忌の塔。決して近寄ってはならないと戒められている。そこには魔女が封じられているという。

この世界を破滅に導いたとした魔女が。

少女が自身の部屋に戻ると太陽が居た。否、彼こそが魔王を打ち倒した勇者。この国の王子であり少女の義兄である。

「お帰り、シエーラ」

「また図書館に行っていたの？」

穏やかに少女を迎える王子ともう一人。

王子とよく似た容貌の、少女より五つ六つ年上の美しい女性だった。

「ユーリア」

嗜めるように王子が名を呼べば、ばつが悪そうに口を開じる。

「お前も剣ばかりでなく少しばしは書にも興味を持ったほうが多いのではないか？」

「……だつて文字を見ると眠たくなるのですもの」

ふいと顔を背けた女性は少女に近づくと腰をかがめてその手をとつた。

「シエーラ。お姉さまとランチにしましうねー! 今日はお庭にテーブルを用意させたのよー!」

『お姉さま』と言つからにまことに女性もまた王女なのだ。

反応の薄い・・・といつも皆無な少女をお構いなしで手を引いて行く。

それをやれやれと肩をすくめながら王子が続いた。

離宮にある庭園は、例の本好きな王妃によつて様々な花が植えられ一年を通して花の枯れる時がない。

今の時期に咲いているのは薄紅の花びらのアンネローズという小

ぶりの可愛らしい花だ。

「アンネローズはショーラのよつな花ね」

コーリアはそう言つてテーブルにも飾られているアンネローズを手にとるとぐるぐるとまわしてショーラの髪に飾つた。

「ほら似合つ。お兄様もそう思われるでしょ?」

「そうだね。ショーラはお前と違つて可愛らしいから」

「もつお兄様はいつも一言多いのですわ!」

「そりかな?・・・・・ショーラはどう思つ?」

「ショーラを味方につけようとしてもそりはいきませんわ!」

一人の間に挟まれた少女はその騒がしさにも関わらずもくもくと食事を口に運んでいる。

傍に居る女官も慣れているのか、微笑さえ浮かべて給仕をしている。

彼女は先ほども少女についていた女官だった。

「アニー。貴方はどう思つ? お兄様つて一言多いわよね」

「やつ言つお前は一言も二言も多いだろ?」

「もつああ言えば一言つ!」

じゃれかかる子犬をあしらひよつて王子は悠然とした姿勢を崩さない。

一見仲が悪そうに見えるがお互いの言葉に悪意は含まれていない。だからこそ穏やかな雰囲気は崩れない。そして無言の少女は異質だった。

「僭越ながら申し上げさせていただければ、一の姫様にも姫様と同じように御手を動かしていただきたいですわ」

女官の言葉につつと口を閉じた王女は小さく溜息をついてフォーケを手にとった。

せっかく用意してもらった料理が冷めてしまつ。

「ショーラ、美味しいかい?」

王子の問いかけに一瞬動きを止めた少女は、小さく頷いた。

「それは良かつた。たくさん食べなさい。大きくならなければ、ね

？」

少女は感情を隠さない黒い瞳で王子を見つめた。

少女の反応は薄く、言葉も発しない。せめて表情でも動けば違うのだろうがそれさえも鈍い。

養女となつた当初、名ばかりの姫とはいえ容姿の可憐さから周囲も騒がしかつた。

亡国の姫君がその愛らしさゆえに魔王に攫われたのだと。しかし哀れみも、甘い言葉も、罵りさえにも反応を見せない少女にやがて周囲に集つていた人々は少なくなり、少女は離宮の奥へ身を潜め表へは出なくなつた。

そんな少女を唯一気にかけるのが、魔王の城より救い出した王子とその姉妹だった。

「ねえショーラ。今度街へ買い物に行きましょう?」

「・・・・・」

少女は首を横に振つた。

「大丈夫よ。何も心配することは無いわ。世界で一番強いと評判のお兄様が護衛ですもの」

「私がついて行くこと前提か・・・」

「あら。お兄さまは私とショーラに何かあつてもよろしいの?」

「お前はともかくショーラは心配だな」

何しろゴーリアは一騎士団を任せられるほどの剣の腕を持つている。

「何も遠慮することは無いのよ。あなたは私たちの妹なのだから」任せておきなさいと張り切る王女は、少女が首を振つて断つたことは記憶に残していないらしい。

困つたことだと呆れながらも王子が口を挟まないのは、王子も偶には少女が外に出たほうが良いと思っているせいなのか・・・。

「あらあら。それでは私は姫様のご用意をしなくては

女官も久しぶりの腕の見せ所に気合を入れるのだった。

\* 2 \* (後書き)

ほのぼの空気が漂つておりますが、シリアルです。

少女の手の平に小さな炎が点っていた。  
それは初めて少女が手にした魔法の欠片だった。

「数日、王宮は慌しい気配に包まれていた。  
喧騒とは遠いところにあるはずの離宮にまでその騒々しさが伝わ  
つてくるのだから相当だ。」

だがおかげで王子も王女も姿を見せない。

気軽にどこにでも出歩いているように見えるが、この国の軍事の  
中枢にある一人の仕事は多く責任も重い。

少女は手のひらの火を消すと、部屋に置かれているチェストの引  
き出しを開けた。

茶色のマントは先日城下への買い物にお忍びで連れ出された時に  
着せられたものだ。

目立たないようになると地味なものを女官は選んだのだろうが、どれ  
ほど地味にしようと三人揃つていると目立つなどいうほうが無理な  
話だった。王子や王女は髪まで被つていたが効果は無いよう見え  
た。

女官も苦笑して見送っていた。

そのマントを取り出した少女は、周囲をもつ一度伺つて庭へと続  
く扉を潜つた。

目指すのは図書館から見えた聳え立つ塔。

見つからば引き止められぬ。

そこには近づかないようひと皆が口を揃えて少女に注意した。

だと。

のだろうか。

それとも魔王より魔女のほうが強いとも言つのだらうか。

塔の下にたどり着いた少女はぐるぐるヒヤーを回る。

石レンガに縦き目が無く、そこにはも入囗が無いのだ。  
困つたように上空を見上げ、そつと石レンガに手をついた。

すると・

すつと引き寄せられる感覚がして、少女は踏鞴を踏むよつて塔の

中へと転がつた。

၁၇၁

頭上から響いた笑い声に膝についていた少女は勢いよく身を起こし、声のしたほうを見上げた。

「久しぶりのお客様・・・いえいえ、初めてのお客様ね」  
豊かな銀色の髪が視界全体を覆い尽くす。

女は宙に浮いていた。

「ようこそ小さなお姫様」

の周囲をぐるぐるまわる。

止めるよ」と少女は手を伸ばすが、届いたと思った瞬間に銀の髪は空気に溶けるように消えてしまう。

「予言の魔女である私にどんな御用かしら？」

果たして声を無くした少女がどのように魔女に訴えるのか。

「弟子にして」

声を失ったはずの少女は、小さくけれどせつまつと口にした。  
少女は声を失ってはいなかつたのだ。

じつと少女は魔女を見上げていた。  
己の言葉がどのように画いたのか、魔女がどのように反応するのか見定めるようだ。

「弟子？私の？」

「そもそも面白い」と聞いたとばかりに手を丸くし、軽やかな笑い声をたてる。

「・・・何がおかしいの」

「おかしいわ、おかしい。この私にそんなことを言つなんて。知らないの？私は予言の魔女よ」

「・・・・」

少女の顔に訝しげな色が浮かぶ。

少女が知っているのは、この塔には破滅を招く魔女が封印されていることだけだ。

それが『予言の魔女』と呼ばれているのかは知らない。

だから。

「知らない。でもあなたは魔女でこの世界を滅ぼすほどの力を持っているんでしょう？」

少女の言葉に魔女はまた笑う。

「世界を滅ぼしたいの？」

「・・・いいえ」

「おかしいわ。世界を滅ぼす氣は無いのに滅ぼす力を求めるの？」

「世界を滅ぼすほどの力が欲しいから」

じつと少女と魔女の視線がぶつかりあつ。どれほどの時間、見詰め合つていたのか。

「良いだらう。運命の娘<sup>さだめ</sup>」

魔女の声のトーンが変わつた。低めに、腹の底から響くような声<sup>こゑ</sup>。

「お前の思惑如何にようぢず弟子にしてやひやう」

朱唇がにやりと歪み、背筋が凍るような不気味さが増す。

「ただし」

「・・・・・」

「私の言つ条件が呑めれば、よ

再び魔女の声が軽いものに変わる。

「・・・何?」

「先には言えないわねえ」

聞かなければ弟子にはなれない。聞けば後には退けない。  
「私の目的を達成する障害にならなければ、呑んでもいい  
「心配いらないわ。ちょっとしたお願ひだもの」

宙に浮いていた魔女が少女の傍に下りてくる。

そして内緒話をするように耳元に口を寄せ、囁いた。

「・・・・・」

「ね?簡単なことでしじう?」

ふふふと少女の反応を楽しむように魔女はその周囲をふわふわと回り始める。

「もちろん貴方が目的を達成した後で構わないわ

魔女が何を言ったのか。

少女は変わらず固い表情で自分の周りをぐるぐると回る魔女を見つめた。

その中に何か眼が隠れているのでは無いかと見定めるよ！」。  
そしてゆっくりと田を瞬いた。

「その条件で、良い」

パンツと何かが破裂したような音がして、少女に無数の白い花びらひらひらと舞い落ちる。

「取引成立ね！」

最後にぐるりと一回転した魔女が、少女の目の前に降り立つた。  
改めて自己紹介しましょ！私は予言の魔女。グリンダよ」  
貴方は？と魔女が首を傾げる。

「私は・・・」

少女の瞳に一瞬迷いが浮かぶ。

「サラ。そう呼ばれてた。・・・本当は違うけれど  
『いいわ。じゃあ貴方のことば”サラ”と呼ぶわね！』

こうして少女は魔女の弟子となつた。

部屋に戻った少女は絶妙のタイミングで現れたアニーに身包み剥がされた。

あと一歩遅ければ出歩いていたことがバレていたかも知れない。

「姫様。隣国からの御使者がいらっしゃるのです」

「・・・・・」

それで王子も王女も忙しく立ち回っていたのだろう。

だがそれが少女にどのような関係があるのか。姫とはほぼばかりの居候に。

「あら。そのような顔をなさい。姫様も鳳凰の間にいらっしゃるのですよ」

「・・・・」

少女は首をかしげ、そしていやいやと首を振った。

「駄目ですよ。陛下と殿下のお言葉ですから」

人前に出ることを極端に忌避する少女に、それではいかんと事ある毎に王と王子は引っ張り出そうとする。本気で嫌がれば渋々折れる一人なのだが今回ばかりは効かないらしい。

アニーは準備万端でドレスを抱えている。

少女は嫌そうに大きな溜息をついた。

広間に姿を現した少女の姿に、一瞬の沈黙が落ちる。  
誰もが少女に視線を飛ばし、様々な思惑を孕ませる。  
名ばかりの王女とは言え『王女』であることに変わりは無い。ましてや王も王子も分け隔てなく接するのを目にすれば。

「ショーラ。よく似合つよ」

王子の言葉に僅かに頭を下げる。

アニーが少女のために用意したドレスは白を基調として、紫のフリルで飾られていた。

少し大人っぽい雰囲気もあるそのドレスは少女の黒髪をより美しく見せた。

「いつもよりずっと大人っぽくて素敵ね！」

ユーリア王女も少女を囮む。

「殿下方、どうぞこちらへ」

宰相が王の元へ王子たちを招く。

「揃つたな。我が子供たち」

穏やかに王が笑っている。その隣の王妃の席は長らく空席だ。

「そうして三人揃つていると下手な絵画を見るより眼福だな」

王子は母親譲りの金髪、王女は王譲りの燃えるように赤髪、そして少女の漆黒のような黒髪。

容姿を褒められた王子は軽く頭を下げ、王女はにこりと笑い、少女の表情は動かなかつた。

「さて、お前たちにアルカーナの使者殿を紹介しよう」

王の言葉に待つてましたと使者が進み出る。

その中の一際派手な衣装を身に着けた女が第一声を発した。

「お田にかかるて光栄ですわ、イルシオン殿下。魔王を打ち倒した高名はわが国にも響き渡つております」

女の田は獲物を狩る狼のように飢えていた。

「それは恐縮です。しかし魔王を倒すことが出来たのは私の力だけではありますんから」

「まあ謙虚でいらっしゃる」

ほほほと笑い声をたてる様に、コーリア王女の眉が寄る。使者だというのに高飛車な態度の女は誰なのか・・・恐らくはアルカーナの王女あたりだろうと見当をつけた。

「改めまして。私、アルカーナの第一王女リリアーナにござります」礼儀作法にのつとつてドレスの裾を持ち上げ頭を下げる・・・王子だけに。

コーリア王女の顔が明らかに不快そうに歪められた。

「此度は貴国と我がアルカーナの親善を深めるために参りました」貴国というよりは『貴方』と親交を深めたいのだとリリアーナの田は訴えていた。

「遠いところをわざわざお越しいただきありがとうございます。わが国に名物といつもはそういうのはありませんが美しい国です。どうぞ楽しんで行って下さい」

王子はリリアーナ王女の訴えを軽く無視して、外向け用の笑顔を貼り付けている。

「よろしければ殿下に案内をしていただけませんこと?」

「残念ながら、先約がありますて。翌日より軍の演習に出る上にござつております」

王子の肩書きには軍の総統といつものがある。その名の通りこの国において軍の最高指揮官である。

「まあ・・・それは残念ですわ

「申し訳ございません」

しかし何事もトップが動くといつのはあまり無い。

軍の演習があると言つても、王子がするべき役割はその計画と結

果の報告を受けることだ。

つまり、王子が演習に出るなどただの断る口実だ。

そんな事情など察する「」ことが出来ないリリアーナ王女は額面通り受け取つて落胆してゐる。

これで柄が悪ければ舌打ちでもやりかねない雰囲気だつた。

「代わりと言つてはなんですが、妹が貴方の案内を致しましょう」「は？」

予想だにしない飛び火にユーリア王女の顔が盛大にゆがんだ。

その顔が『誰がこんな女の相手など。冗談ではない！』と叫んでいた。

「こりゃ見えても我が國の一軍を率いるもの。護衛としても打つてつけでしょ」「う」

「ああ、それは良いな。女同士にしかわからぬ話もある。年頃も同じ頃であるし。どうかなリリアーナ王女？」

王にまで言われてはユーリアもリリアーナも断る術を持たない。

「ま、まあ頼もしいですね。よろしくお願ひ致しますね」

「・・・武人ですので気のきかないところもありますが、私でよければ」

二人の王女は互いに微妙な空氣を抱きながら微笑みあつた。

「シヨーラ。明日は空けておくんだよ」

「」そり王女が耳元で囁いた。

少女は目に沁みるような青い空を見上げた。

「晴れて良かつた」

背後で王子がそう呟いている。

現在、少女は王子に抱かれて馬に乗っていた。

ちなみにヨーリア王女とリリアーナ王女は昨日約束した通り二人で（もちろん護衛も居たが）城下に出かけたらしい。

そして何故少女が馬上に居るのかと言えば・・・

朝食を食べているところへ王子の襲撃に遭つたからだ。

「シェーラ。散歩に行こうか

にこやかに現れた王子に、いつもの庭園の散策だと思つた少女は無表情で頷いた。

しかし少女を連れた王子は庭園を通り過ぎ、離宮の出口まで来るとそこに繋いであつた馬に少女を抱き上げ、あつとこづ間に走り出した。

少女が拒絶する隙も無く、王子は馬を走らせるとき城下を抜けたところで速度を緩めた。

そして現在。

草原地帯をかぽかぽ馬に揺られながら『散歩』しているというわけだ。

「もう少し行つたところだよ

何が。

声が出たならば少女はきっと聞いたことだろう。

「シェーラに見せたいと思つたんだよ

草原にある小高い丘を登つて、見下ろした先には湖があった。

少女が無表情で見下ろした先には、鹿の親子が居た。

母鹿と思える足元に一頭の小鹿が戯れている。警戒心の欠片も伺えない。

微笑ましいワンシーンだ。

「先日演習の際に見つけたのだよ。このあたりは天敵となる肉食の獣が居ないから安心して子育て出来るのだろう」

鹿の親子を見る少女の無表情はぴくつとも動かず、その表情からは喜んでいるのか悲しんでいるのか可愛いと思つてゐるのか全くわからない。

その表情が見えないからか、王子は気にせず楽しそうだ。

「もう少し近づいてみよっか」

馬首を返して丘の横から湖のほとりへと下りて行く。

ここまで近づくと野生動物なら警戒して逃げていくものだが、母鹿は僅かに視線を向けただけで逃げる様子は無い。それどころか小鹿たちの一頭が王子たちに近づいてくる。

おぼつかない足取りで馬へと近づいた小鹿は不思議そうに見上げて、母鹿に戯れるように馬の足に擦り寄つた。馬は僅かに鬱陶しそうにしながらも好きなようにさせている。

「無防備なものだ。・・・もう少し警戒心を持つたほうが良いな」

王子はそう言つと母鹿のほうを向いた。

母鹿は子供の様子を伺つていたが小さく鳴くと、馬にじやれついていた子供が一目散に駆け寄つてくる。

帰つてきなさい、とでも叱られたのだろうか。

「母鹿のほうはそれなりに聴い、か。・・・ん？」

少女が見上げていたのに気づいたのだらう。王子が苦笑する。

「少し殺氣を飛ばしてみたのだよ」

返された言葉に少女は鹿へと視線を戻した。

(俺は野生の動物を見たことが無い。・・・動物は人と違つて勘が  
良い)

少女はきょろきょろと首をまわした。

「どうした?」

「・・・」

少女は俯き首を振った。

もう鹿たちにも目をやらない。

どこか意氣消沈した空気を感じ取ったのか王子は困ったような顔  
をしながらも帰路についた。

\* \* \* \* \*

帰城した城には鬼が居た。  
鬼の名はゴーリアと言つ。

「お兄様っ！」

離宮の入口に王子立ちで一人を待ち受けていた。

どうやらコーリア王女を出汁にして一人で出かけていたことがバレたらしい。

「ただいま、コーリア」

だが怒っているコーリア王女を気にすることなく王子は悠然と馬を下りると、続けて少女を抱き下ろす。

「私怒りますのよ！」

「そのようだ」

怒り心頭に達しているらしい王女は腰に手を当て王子に詰め寄る。「すまなかつたね。リリアーナ王女の毒氣は少々ショーラには強すぎるだろ」と思ったのだよ。その点、コーリアならば上手くあしらつてくれるだろ？』

「ま、まあ確かに。私ならともかくショーラでは好き放題に言われてしまふでしょうねけれど」

「そうだろう」

わが意を得たりと王子は頷く。

「ショーラもコーリアに感謝しているよ

「ショーラが？・・・本当に？」

何故か未だ王子に抱かれたままだった少女はコーリアの問い合わせるような視線に、無言で頷いた。

「・・それなら仕方ありませんわね！」

上手く丸めこまれた王女は、上機嫌になつて少女と王子と共に離宮に入つて行く。

王子と少女はそつと視線を見交わした。



「あなたに魔法の才能は無いわね」  
魔女は宣告した。

「・・・弟子にする前に言って」

少女が魔女を睨みつけた。

「あら嫌だ。才能が無いと言つただけで使えない訳じゃ無いのよ」  
ほほほ、と相変わらず魔女は軽やかに浮遊している。

少女にとつては鬱陶しいだけだろ？

「才能は無い。でも魔力はあるのよ」  
「才能は無い。でも魔力はあるのよ」  
「で？」

「だから努力でカバーしなさい」

他人事のように言つて、魔女は大量の本を積み上げた。

「才能溢れる私には無用だつたけれど凡人のあなたには必要でしょ  
う？」

「・・・それはどうも」

いちいち勘に触る魔女の言葉に多少の機嫌の悪さを見せつつも少  
女は無表情でそれらを受け取つた。

努力することに抵抗は無いらしい。

少女の座るテーブルの脇に積み上げられた山から一冊取り上げる。

「それは火の属について書いてあるわ。きっとあなたと一番相性が  
いい」

「・・・わかるの？」

「燻るのは闇の炎。照らすは聖なる光。天地を貫き永久に」  
魔女の言葉は時折意味不明となる。

予言なのか言葉遊びなのか判断が出来ない。

少女は無視して本に目を戻した。

魔女に弟子入りしたからといって、何かが劇的に変わったわけでは無い。

ただ少女は時間を見つけてはそつと塔にやつて来て、城の図書室にも置いていないような魔術の本に目を通す。その本の数は何処に仕舞われているのかもわからないほど膨大で、果たして読み終えることが出来るのかもわからない。

だから努力しろと言うのならば、そつするしか無いのだろう。一刻たりとも無駄にすることなく、読み続けるしかないのだ。

目的を果たすために。

「まあ姫様っ！」こんなところにいるじゃんなんて…御髪に草がついてらっしゃいます」

塔からそつと抜け出して、草をかきわけた先の庭でアニーに見つかった。

「隠れ鬼でいらっしゃいますか？」

草をつけた様子の少女が面白かったのだろう、思わずといった様子でアニーが笑いを漏らす。

少女は首を傾げた。

「そうですね。ユーリア様がお探しです」

「・・・・・」

「成人の儀が近づいてしまった。そのお衣装選びをしたいのだそうです」

ますます少女は首を傾げる。王女の成人の儀式に少女は全く関係が無い。・・・はずだ。

少女の疑問にはアニーが答えてくれた。

「花束を渡す役の少女をシエーラ様がなさるので、お揃いで衣装を揃えたいのだと仰つて」

「・・・・・」

「・・・お伝えしていませんでしたかしら?」  
全くもって。

無表情で不機嫌になるという器用な特技を披露しながら、少女は容赦なく連行された。

「シエーラ! もう何処に行つっていたの?」

部屋に入るなり腕を引かれて、長椅子に掛けさせられた。  
その隣にユーリアが座る。

目の前には色とりどりの布が散乱していた。

「次はそれを見せて下さる?」

戸惑う少女も何のその。王女は商人らしき相手に指示を出す。

「・・・そうでん。デザインはそれでいきましょう。色は・・私とシエーラでは似合う色が違うから別々にしたほうがいいわね  
そして今度は色の選定に入る。」

次々と自分で決めて行くユーリアの隣の少女は何もすることが無い。

「この青色はどう? シエーラによく似合つのではないか?」

「ええ、お似合いですか」

「ではこれにしましょう。私は・・・やはりこの赤かしらねえ  
シックな赤色は王女の鮮やかな赤髪を更に際立たせるだろう。」

「シーラはどう思つ?」

問いかけに少女は、こくりと頷くばかり。

あれもこれもと、何故か式典以外のドレスも注文され、少女の瞳は知らず閉じていた。

「あら、眠つてしまつたの?」

「姫様はあまりご興味がござつませんから遠慮だつたのでしょうか?」

「・・・まだまだ子供ねえ」

そう言つた女の顔は微笑ましそうに笑つていた。

魔女が囁く。

今まで浮かべた中で最高に鮮やかに囁く。

「免許皆伝よ。」

「・・・何が」

「貴方に教えることは何も無いわ

「特に何か教えてもらつた覚えも無いけれど?」

「可愛くないわね~」

少女が魔女の塔に通うようになつて一ヶ月が経つた頃だった。

「気づいてなかつたの?」

「何が?」

ふふふ、と魔女が笑う。

「この塔の中は時間の流れが違うのよ」

少女の顔がぎょっとして魔女を見上げた。

「あら。心配はいらないわ。この塔の中だけ。切り離されているだけだもの。外の時が流れても、外の時が止まつても。ここは別のモノ』なのよ」

魔女の言葉が果たして真実なのかどうか、少女は今さらながら自覚した。

何時間も、それこそ城の者たちが不審に思わないはずが無いほど の時間をこの塔で過ごした。

少女はただそういう『気』がしていただけと思つていたが、眞実 時は過ぎていたのだ。

「だから、あなたの手にあるその本が」

最後の一冊なのよ。

魔女の言葉に少女はぎこちなく、本の表紙を開じた。

「・・・読んだだけよ。まだ何もしていないわ」

「知識は力よ。この頭の中に、すでに力はある」

「それをどう使うかは、少女次第なのだ。

ふわふわと漂っていた魔女が少女の目の前に降りてくる。

「さあ約束の時が来たわ」

少女は魔女と約束した。

弟子にする代わりに魔女の願いを叶えると。

「私を滅<sup>ほろぼし</sup>て」

少女は座っていた椅子から立ち上がる。

魔女は笑顔で佇んでいる。

「・・・て」

少女は目を閉じる。

「どうして、そのままではダメなの・・・?」

「待つていろの」

魔女はまるでこちらが少女のようにな夢みる眼差しで呟いた。

「愛した人が待っているの」

少女が胸を抑えた。

「・・・待っている、の?」

「ええ。ずっと待ってくれているわ」

「・・・そう」

少女の手に光が集う。塔の闇を打ち消すほどの強い発光が迸る。

「私は、残されてしまったのに」

光が弾け、粒子となつて降り注ぐ。  
魔女の姿はもうどこにも無かった。

『小林沙耶』

「我、我が名に誓つ」

誰も呼ぶことの無いその名だ。

我が敵に、死を。



「…」

「…お前。どこのから入りこんだ  
え？」

周囲を黒い壁に囲まれた広い部屋。  
光が無いというのに、何故かそれがわかつた。  
そして大きな溜息をつかれたことも。

「世界の迷い人か。何ものよつとこに現れずとも」

「…誰？」  
ちつとも怖いなんて思わなかつた。だから誰なんだらうと不思議  
に思った。

「私は小林沙耶」  
「…」「バーシサー」  
「…それ誰」  
「お前の名だらう?」  
「違つて!小林、沙耶!」・ば・や・し・せ・や・  
「サラ」  
「…」

かくり、と少女の首が傾いた。  
「で、あなた誰?」

「俺か？聞いたら後悔すると思つがな」

「はあ？」

「聞いたら後悔する名前なんて聞いたことも無い。

「で、誰？」

「魔王だ」

「まあう、さん？」

何だか女性のよつやな名前だ。

「・・・・・仕返しか？」

「はあ？」

少女の眉が不審げに顰められた。

そんな私と魔王の出会いでした。



「」使用は計画的に。

魔女の塔から出た私は、世界が変わっていたことに気がついた。  
否。世界が変わったんじゃない。私が変わったんだ。

どういう理屈かわからないが、世界には魔力が満ちている。これ  
ほどのものを何故今まで感じとれなかつたのか不思議なほどだ。

呪文なんて必要ない。

ただ、そうしようと手を伸ばせば世界から身の内から魔力が溢れ  
出て形を成す。

「・・・・・」

・・・ああ。

ああ！

叫びだしたい。

私は力を手に入れた。

焦らない。・・・焦らない。これからなのだから。

「姫様？・・・姫様っ！？」

アニーの掛け声に少女は振り返つた。

「どうなさいましたっ・・・何かお辛いことが？もしや、どこか怪  
我でもつ！？」

何を慌てているのかわからないが、どれも違つ少女はただ首を振  
つた。

辛いことも怪我もしていない。

ただ、嬉しいだけ。

嬉しくて、涙がでているの。

「今日は外の風が冷たいですわ。中に戻りましょう」  
アニーの言葉に特に断る必要も無かつた少女は、促されるまま離宮の部屋へと戻った。

離宮には魔力が満ちている。

部外者を進入させないための結界だ。

守られているのか、監視されているのか・・・魔王の城から救い出された身元の知れぬ少女を警戒するのは無理も無い。

その割に王子や王女という要人がこだわり無く出入りしていたのは、少女の無力に見える様子ゆえか。

「姫様。何か飲れますか？」

「・・・・・」

「ぐんと頷くと紅茶に似た飲み物をミルクで割つて出してくれる。それが少女の、沙耶の気に入りだと知っているから。

何も知らない、ただ少女の世話をしてくれることの人は・・・。

「お熱いですから気をつけて下さいね」

ありがとうと心の中で呟いてカップに口をつけた。

「いよいよ明日でござりますね」

「・・・・・」

少女は出来上がった青いドレスを思い浮かべた。

第二王女コーリアの成人の儀が行われる。この世界ではそれが結婚式の次に盛大に執り行われるものらしい。各国の代表者も揃う。そのほとんどがコーリア王女というよりは、勇者であるイルシオン王子が目当てであつても。

「髪はどうのように結い上げましょ? 飾りは銀細工がよろしいかしら、金細工・・・」

ぶつぶつと夢見るよに話したアニーは放つておく。

・・・警備は厳しいものとなるだろう。

だが少女は主役の最も近い場所に座る。もちろん本当の主役もす  
ぐ傍だ。

少女はそつと誰にも見えないよつこ、笑う。

まずは、揺さぶりをかけよつ。

その力がどれほどのものか見極めよつ。  
ねえお義兄さま。

私の仇。

翌朝は早くから起<sup>レ</sup>され文字通り体を磨かれた。

「・・・・・」

「成人の儀はこの世に生み出して下さった神に感謝する式典です。身も心も清めるのですよ」内心の不機嫌さを悟つたアニーがそう説明してくれた。すでに抵抗する気力の無くなつていた少女はぐつたりと椅子に掛けている。

タオルドライされた髪を魔法で丁寧に乾かされている。

「美しい黒髪ですこと」

ブラッシングされた髪は艶々と光を放つようだ。しかし主役はあくまでヨーリア王女であり少女では無い。なぜここまで気合を入れなければならないのか・・・

「髪飾りはこちらの白金のティアラに致しました。服と同じ青石ですから髪のお色ともよく合いますわ」

そうですか。

とかし少女には思えない。

髪が出来た少女は立たせられロープを取られて白いビスチェを着せられる。総レースのそれは機械の無いこちらでは、かなり高価な代物だ。しかも少女が着るような子供サイズでは成長してしまえば用済みになつて着ることが出来なくなる。

しかしそれがどうした。このビスチェの一枚・・・100枚や千枚でこの国の身代が揺らぐはずも無い。

「姫様はまだお若いですから腰紐はあまりきつく結びませんわね」

それには無言で頷く。

アニーは満足そうに微笑んで、用意していた青いドレスを手にとつた。

まだ若い、幼いといったもといい少女が着るドレスは踝の長さまでしかない。

胸元にはビスチェのレースがちらりと覗き、袖は花びらのようになびいた薄い布が重ねられている。

手に白い手袋を嵌められ、光沢のある服と揃いの靴を履かせられて姿見に前に立たせられる。

「きっと誰もが姫様に魅せられますわー！」

注目はされるだろう。

何しろ『黒』はこの国で特別な意味を持つ。

その時扉を叩く音がしてアニーが入口に向かつた。確認するまでも無い。

この離宮に足を踏み入れることが出来るのは王子と王女。そして王女はこの儀式の主役でのんびり出歩くことが出来ないとなれば…。

・

「シーラ」

鏡に満面の笑みを浮かべる王子が映っていた。

「とても奇麗だよ」

「…」

「本当に誰もがきっとシーラに注目するよ」  
「みんなが」とシーラは口づけた。

違ひの意味で、ね。

「本当に奇麗だよ、お姫様」

王子がシーラの手をとつて口づけた。

衝動的に払い落としそうになるのをぐつと我慢した。

「アニー、もう準備は万端かい？」

「はい。問題ございません」

「では、お姫様。私めにエスコートを勤める栄誉を賜つてさこます

よつ

「・・・・・」

似合わない人間がすれば滑稽にしか見えないことも王子があれば嵌りすぎて笑いさえ出来ない。

シェーラはやはり無表情で無言で、手を出した。

何故こんな無表情な子供に構い続けるのだろうか？

「ありがとうございます。では参りましょう」

子供といえど、身元も知れない不審人物である少女を王家の養子に迎え入れることが出来たのはこの王子が働きかけたからに違いない。

何を考えているのかわからな男に手を引かれながら、少女は離宮の外へと続く扉を見上げる。

この離宮に連れてこられて以来、2度目となる出入り。

この瞬間だけは離宮を覆っていた結界が消されている。

「シェーラ」

声をかけられ、一步足を踏み出した。

本宮の大広間にはすでに人が集まり、真ん中を開けて両脇に整然と並んでいた。

少し遅れてやつてきた王子と少女は否が応でも目だつてしまつ。視線が集中するのが肌で感じられる。きつと以前の少女であつたら俯いてしまつただろう。

だが、誰がそんな弱いところを見せるものか。

少女に後ろめたいところも恥じるところも何も無い。黒髪に忌避するような視線を投げかけようと、幼さに侮蔑を投げかけられよう。

全てはこの隣を歩く勇者のせいなのだから。

王子は玉座の前に着くと膝を折つて、父でもある王に挨拶をした。少女もそれに習つ。

「よくぞ参つた我が誉れの子、わが国の勇者イルシオン」

「過分なるお言葉、光栄にござります」

「何を言つ。そなたの英名を知らぬ者などこの国にも諸国にもおらぬ」

「恐れ入ります」

「姫もよう参つた。話は常々一人より聞いておる」

王子の取り成しとはいえ、どこの馬の骨とも知れぬ少女を養女に迎えた王は快活に笑つていた。

少女は小さく頭を下げた。

二人は王より一段下に用意されていた席に腰掛ける。いよいよ本日の主役の登場だ。

だが。

少女は無表情でその時を待つ。

「た・・・大変でござりますっ！！」

荒々しく広間の扉が開け放たれた。

駆け込んできた兵士の尋常でない様子に、まずは両脇で控えていた貴族たちが騒ぎ出す。

今にも兵士が開け放った扉から逃げ出しそうな様子だ。「如何した！」

しかし王子の大喝に広間は静まり、兵士が駆け寄ってくる。

「報告致しますっ！・・・魔物が、現れてございますっ！！」

王子の顔が厳しく讐められる。

「王宮内か？」

「はいっ・・王女殿下が防いでおられますっ！！」

それだけ聞くと王子はさっと王を振り返り、頭を下げた。「行つて参ります」

「うむ」

王の表情も厳しい。

有り得ない、そう言いたいのだろう。

堅牢な結界に阻まれた王宮には魔物が入り込む余地など無い。・・・

・はずだつた。

魔王を倒し弱体化したとはいえ全ての魔族、魔物が消えうせた訳ではない。むしろ魔王を倒した勇者が居るこの国は魔の者たちにとって仇敵とも言える。

そのために万全の体制を敷いていた。

「シヨーラ。決してここを動かないように

王子は言ひ含めるよつにそつ言つと、人々の間を颯爽と駆けていつた。

無表情であることをこの時ほど少女は感謝したことは無い。

もしそうでなければ、こみ上げる笑いを我慢出来なかつただろう。

復讐は始まつてゐる。

これはちょっととしたご挨拶。

これから始まる劇の幕開けに相応しい。

\* 1-1 \* (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。」  
やがてこめます。

離宮と本宮の間には庭園がある。

そこで阿鼻叫喚の惨事が繰り広げられていた。

人の4、5倍ありそうな魔物の容貌は赤黒く醜怪で異臭まで撒き散らしている。

幸いなのは、その巨体を生かして暴れる以外に能が無さそうなるころか。

だが通常予測できない腕の長さや動きに兵士たちは苦戦している。城壁付近で座り込んでいるのは大方その腕によつて殴り飛ばされた者だろう。

胸のプレートが陥没していることからもその怪力さが伺い知れる。ユーリア王女が距離をとつて四方より攻め込むように指示を出しているが、浮き足だつている兵士たちはろくな動きが出来ていない。王女の式典用の衣装はすでに無残な様だ。

「魔術師たちはどうした？」

近くに居る兵士に王子は声をかけた。

「何かあつてはならぬと本宮の警備に・・・」

王子は無言で頷いた。今まさにここでの『何か』が起こつているのだが。

居ないものを強請つても仕方ないと諦めたのか、王子は腰の剣を抜き眼前に構えた。

勇者という名は伊達では無い。

その瞬間に纏つた霸気に暴れていた魔物が視線を動かした。

「お兄様っ！」

叫ぶ王女に下がるように指示を出す。

兵士たちも魔物から距離をとる。彼等も王子の強さを十分に知っている。

「はっ」

息を吐いた王子は、炎をまとった剣で魔物に斬りこんでいく。

魔物も地響きをたて、王子を押しつぶさんと腕を振り回す。

それを難なく避け、その腕を蹴つて飛び上がり魔物の顔面に剣を叩き込む。

GYAAAAAAA!!!!

一つしか無かつた目玉を潰され、魔物は苦痛と憤怒にいつそう激しく暴れだした。

しかしすでに王子は背後にまわり、足に剣をつきたてた。

再び魔物の叫び声があがる。

炎の剣は魔物の肉を灼き、何とも言えない異臭を撒きちらす。だが王子は容赦することなく、今度は膝をついた魔物の腕を根元からぶつた切つた。

これで魔物の動きの半分以上は封じたことになる。

最後の抵抗とばかりに魔物は残った片手を無茶苦茶に振り回すが、すでに動きを見切つている王子は剣の炎を消す。一瞬元の鋼の色を取り戻した剣は、すぐに根元から光に覆われて行く。

これこそが王子を勇者たらしめる魔の者を屠る光の剣。

その剣を袈裟懸けに払い、露になつた魔物の心臓に突き立てた。

UGYAAAaA!!

魔物は断末魔の声をあげ、その命の火を消した。  
後に残るのは骸のみ。

「・・・ば・・・万歳つ！王子殿下万歳つ！…」

「我らが勇者王子万歳つ！！」

兵士たちでは手も足も出なかつた魔物をいとも容易く倒してしまつた王子に賞賛の声が上がる。

「お兄様・・・」

「大丈夫か？・・・酷い格好だな」

「・・・仕方」じぞこませんでしょ」

苦笑した王子にコーリア王女が憤慨したように顔を膨らませる。

「良いのでは無いか。剣士であるお前には相応しかろ」

だがその言葉にすぐに口元を縋ばせる。

姫である前に剣士であると自負する王女にとつて何よりの賞賛だ。だがすぐに厳しい表情で周囲を見渡し兄王子を見上げた。

「ショーラはどうなさいましたの？」

「本宮の広間だ」

「まあっ！置いていらっしゃいましたのっ！」

「さうがにこの場に連れて来るわけにはいかない」

「ですけれど本宮に放置など・・・つまずいですわ！こんなことをしている場合では」じぞこませんつ！！」

王女にとつて少女は庇護の対象である。

「そうだな、早く戻つてやろう。お前の成人の儀も始まつていない」

「・・・この格好でよろしいかしら？..」

「仕方ないのでは無いか？」

「そうですわね！」

王女付の侍女たちが聞けば悲鳴をあげそうな」とを言いながら王子と王女は本宮に向かつた。

誰も気づいていない。

魔物の骸から魔の根が根付こうとしていたことを。

本宮は有能な魔術師たちが張つた結界で覆われ、魔の侵入の一切を防いでいた。

そのことは魔物の侵入と恐慌状態に陥ろうとした貴族たちを落ち着かせ、わずかばかりの余裕を生み出した。

そうすると自然と視線は異分子へと向けられる。

つまり『魔』の色を持つ少女へと。

彼女のことを詳しく知る者は無い。養女となつたことを知らせた場以降、少女が社交の場に出てきたことは無かつた。ひたすら王族しか出入りの出来ない離宮に居て接触も出来ない。  
もしや養女としたのは擬態で、『魔』の物を監視していたのではないか。

今回の魔物の侵入は少女が居たからこそ起きたことではないか。

人々は疑心暗鬼に囚われる。

疑うような、厭うような・・・刺すような視線が少女へと集まる。だが椅子に座つた少女は相変わらずの無表情で、魔の存在に騒ぐ様子も人々の視線に動じる様子もなくただ変わらず人形のように座つている。

それが異様だった。

「きつと・・・魔物よつ！」

金きり声で誰かが叫んだ。

一瞬静まりかえった広間がざわめく。

人々は責めるよに少女を見、続けて誰かが叫ぶ。

「このままであれば私たちも襲われるぞっ！」

男の甲高い声が響く。

ざわめきは一層酷くなる。

見るからに非力な少女に向けるには憚られる非難はパニック寸前の群集には通じない。

「騎士たちつ！何をしているつーもつさとあの魔物を排せよつー！」

「この国がどうなつても良いのつー？」

周囲に立っていた護衛の騎士たちに動けと群集は叫ぶ。

しかし彼等は戸惑いはしても動くことは無かつた。彼等と群集の違いは彼等を統率する王子が少女を実の妹と同等に扱っていることを知っているか否か。

「ええいつ！この腑抜けどもめつー！」

怒りに赤く顔を染めた貴族の若者が騎士の一人に詰め寄り、腰に下げている剣を遣せと命じた。

「いけませんっ」

「騎士」ときが私に逆らうかつ！

傲慢な物言いは自分が正しいと信じているからなのか。

若者は剣を奪うと少女に向かつて突進した。どこかで悲鳴があがる。

「邪悪なる魔物よつ！滅びよつー！」

鞘から抜き放たれた白刃が広間の明かりを反射し輝く。

少女は無表情のまま、身じろぎもせずその刃を見つめ続けた。

誰もが少女の死を予感したその瞬間。

貫くはずの剣は、鈍い音と共に宙を舞つた。

「王族へ剣を向けるは反逆。どのような反論も意味は無い」  
王子の厳しい目が若い貴族を貫いていた。

「う・・・」

「う、わあああああつーーと腕を押さえながら叫び声をあげ、その広間を転げまわった。

その貴族の傍らにぼとつ、と落ちてきたのは。

剣を握った己の手。

勇者と称えられる王子は公明正大であるが、全ての者を平等に扱つているわけではない。

「シェーラ」

貴族の若者などすでに視界から追いやり無表情のまま座つて眺めていた少女に近づき膝をついた。

「一人にしてすまない。怖かつたるうつ？」

「・・・・・」

「この騒ぎでは成人の儀式も別の日に改めなければならない。それでいいかい、ユーリア？」

「当然ですね。このように汚れた場所でやりたくありませんもの。シェーラ、『ごめんなさい』

王子に並んだユーリア王女に少女は首を傾げた。

「王族に剣を向けるなんてとんでも無い。怖がらせてしまったわ。・

・お兄様、シェーラを離宮に連れ帰つて下さいませ

「・・・後処理があるのだが？」

「父上がいらっしゃいますわ」

兄妹の視線に王は苦笑を浮かべていた。

「すぐに戻つて参れ

「畏まりました」

王子は父王に頷くと少女を抱き上げた。

周囲の人々は息を殺してそのやり取りを見つめていた。すでに王子に腕を飛ばされた貴族の若者は騎士たちによつて治療所に運ばれている。運がよければ腕もくつつけることが出来るだろう。床に飛び散つた血痕だけが、先ほどの惨劇の記憶だった。

人々は魔物の出現よりも、王子の行動とその結果に大きく懼いた。少女は紛うことなき『王族』であり、それを害しようとすれば貴族とて容赦なく処断されるということだ。

「アニー、シヨーラを頼んだよ」

「お任せ下さい」

少女がすっぽり納まるような大きさのソファに下ろした王子は待機していたアニーに少女のことを言付けると本宮へと戻つていった。「びっくりしたでしょう？でももう大丈夫。怖いものはお兄様が片付けておしまいになつたから」

少女の隣に座つた王女は、怯えているだろう少女に精一杯に優しい言葉をかける。

少女は王女を見上げ頷いた。

「お一人ともお飲み物をどうぞ」

「ありがとう、アニー」

テーブルに置かれたグラスを王女が持ち上げ少女に持たせる。「落とさないようにね」

「ユーリア殿下。姫様はもう幼子ではございませんよ」

「・・・そうね。ついつい。だつてシヨーラつたらいつまで経つても可愛いのですもの。シヨーラもあと二年すれば成人ね」

保護された時から一言もしゃべらない少女の年齢をどのように判断したのか、現在12歳とされている。王族の常で成人すればすでに決まっている婚約者と結婚することになる。当然ユーリア王女に

も婚約者が居るはずだが少女は見たことも無ければ名前を聞いたことも無い。一切話題にあがらないのだ。

そして少女にはそのような存在は用意されていない。

それから世間話をしながら過ごすが、王女もアニーも魔物の話をすることとは無かつた。

「・・・ん？どうしたの、ショーラ？」

慎ましく王女の裾を引く少女に、その意味がわからず首を傾げる。「ユーリア殿下。姫様はお着替えをされるようことと仰りたいのでは？」

「・・・・そうね

魔物と対して無残になつた服のままだつた。

「せつかくショーラとお揃いで作らせたのに。・・・ちよつと着替えてくるわ

「そうなさいませ

「シーラ。傍を離れるけれど今日の予定はもう何も無いからゆっくりしてね

「くんと頷いた少女は王女が部屋を出て行くのを視線で追い、その姿が視界からすっかり消えたのを確認して窓の外に顔を向けた。

### 『芽吹け』

心の中で魔法をかける。

もつとも強い野心を持つ者へ。



この国には有名な三人の騎士が居る。

一人はもちろん勇者であるイルシオン王子。

二人目は魔法の使い手でもあり、魔王討伐にも同行した騎士団団長。

そして最後の三人目は王弟ベトレイア。

王佐としても有能な彼は王女の成人に儀式にも当然出席していた。

「殿下。事の仔細について伺えますか？」

議堂には国政に関わる主要メンバーが揃っていた。

その視線が王子に一斉に向けられる。

王子は席から悠然と立ち上がりと一同を見渡した。

「この度中庭に現れた魔物は第三級の魔物です。突然のことに騎士団も対処が遅れ浮き足だつてしましましたが通常であれば十分に彼らだけで対処できたでしょう。問題は何故中庭に魔物が侵入できたのかということです」

前半の王子の言葉に安堵したのもつかの間新たな問題に顔をしかめる。

「王宮の結界が弱くなっているのでは？」

「それはあり得ません。綻びが無いかとすぐに確認させたところ見つかっていない」

「ではどうやって魔物は侵入したのか・・・まさか自分で結界を破り、侵入したところその部分を直したとでも？」

「ははは、随分と礼儀正しい魔物も居たものだ」

ああでも無いこうでも無いと暫く意見が飛び交った。

カンカンと皆を静める木槌の音がして王佐に視線が集中する。

「何れにしろこのようなことが一度とないようになければならない。魔王が滅びたとは言え、魔物は未だ世に蔓延っているのだから」「王佐の仰る通り。魔物がどこから現われたのかその痕跡を現在辿らせている最中です。また初動が遅れた原因には騎士たちの気の緩みもあつたかと思われます。気を引き締め直して事にあたる必要があります」

「では調査は継続することとし、騎士たちの統率は殿下にお願い致します」

「畏まりました」

未だ何もはつきりしていない状態でこれ以上できることも無い。

「次に延期となつたユーリア王女殿下の成人の儀式の日程だが・・・」

「これもすぐ明日に」という訳にもいかない。それぞれに予定がある。

「少々遅れますが一月後の同じ日に」ということで如何でしょうか?」  
王佐の言葉にめいめいが己の予定を思い出すように宙に視線を飛ばす。

「では特に反論も無いようですのでこれで決定とします」

王弟ベトレイアは無駄を嫌う。無駄な時間の浪費を何よりも厭う。

「では陛下よりのお言葉を頂きます」

皆が姿勢を正し、玉座に座す王に軽く頭を下げる。

それまで沈黙のまま皆の話を聞いていた王は立ち上がり、王佐に向かつて小さく頷いた。

「魔物一人に踊らされたとあつては他国から笑いものにされよう。我が国は勇者を擁する国として強くあらねばならない。どこよりも強く、だ。それを各々肝に銘じそれぞれの職務を果たせ」

「はつ」

王の言葉に一同頭を下げる。  
そのまま王は退場した。

「イルシオン」

「叔父上」

皆も退場し、残っていた王子に王弟が声を掛けってきた。

「些かやりすぎでは無いか？」

「そうでしょうか？ 皆に知らしめるには丁度良かつたと私は思っています」

王弟が何を指して言っているのか王子も理解している。少女に対して無礼を働いた貴族に対しての処罰だ。

「ショーラは王族です。その氏素性がはつきりしないとはいえ、公式に王家の養女となつたのです。それに対しての無礼を放置すれば王家を侮られたも同然。態度をはつきりさせておかなければ後々の禍根となると判断したがゆえの処置です」

「お前の言うことも最もなのだがな、やはり氏素性がはつきりせぬといつのが痛いな」

「はつきりしなくともショーラがただの平民で無いことは明らかです。所作も粗野なところが無く、労働の痕跡も無い。また教育係に話を聞いたところかなり高い教育を受けていたようでもあります」

「そうか・・・いずれかの国の貴族の息女であつたのやもしれぬな」

「もしくは王族の」

「・・・本人は未だに口がきけぬのか？」

「幼子が心に受けた傷がどれほどのものか想像することも出来ません。それを殊更に急かして状態を悪化させればこれまでの努力が無駄になってしまっててしまうでしょ?」

「しかし一生世話をするという訳にもいくまい?」

適齢期になれば国内の有力貴族、他国の王族・・・いずれか興入れするのが王族に生まれたものの勤め。

「まだ先の話ですよ、叔父上。しかしそうだとしても、魔王の城より連れ帰った責任を疎かにする気はありません」

「そうだな・・・あの色彩を持つ限り、相手も見つかり難かるう黒は魔の色。

それはこの世界の共通認識でもある。

髪でも瞳でも体のどこかに黒を有する者は彌者として扱われる。少女の行く末はそれだけで暗澹たるものと言える。

「そなたも早う兄上を安心させてやらねば」

「王太子としての義務は承知しています。王妃として相応しいと思う者が居ればいつでも私は迎え入れるつもりです」

「・・・それもまた難しいものよ」

王妃とは王と並び立つ者。王を補佐し、この国で一位の女性として全ての模範とならなければならない。それが出来ない王妃はただの飾りだ。

そんなものは必要無いと王子は言つてゐるのだ。

王弟は苦笑するしか無かつた。

王太子であるイルシオン王子には当然の如く婚約者候補が数人存在した。

だが、魔王討伐に行く際に生きて戻ってくることが出来るかわからぬからということで全ては白紙に戻った。王子が無事に戻つて来た後もそれは白紙状態のままだつた。

幾人もの有力貴族、国外の王族が縁を結ぶことを打診してきたが王子はそのどれにも頷いていない。

「誰ぞ心に決めた者でもあるのか？」

王に聞かれて、王子は苦笑を浮かべた。

「そのような者はおりません。居れば迷うことなく妻に迎えております」

「ふむ・・・」

王家直系であり、希代の英雄である王子はそれだけの力がある。身分違いとて覆してしまっただろ。

「私が妻に迎える者はこの国で一位となります。誰もその権力を凌ぐことは出来ない」

今の王に妃が、王子の母親でも生きていれば話は別だったが。「分を弁え、私と共に在ってくれる者。そのような人であれば、私は喜んで迎えいましょう」

「・・・理想とはかくも難しい」

王は苦笑した。

「しかし、この見合いの申し込みはどうしたものか」

「全てを捨ておく訳にはいかないでしょう。選別した後、時間があれば相手に会うことも勤めでしょ」「う

「その中にそなたの理想の相手があるやもしかねしな」

「そうすることを願いいます」

王子の顔に言葉通りの期待の色は無かつた。

普段、余人の入ることの無い中庭には調査のための兵士や魔術師が姿を見せるようになった。

そこは離宮からも見える場所で、少女は上階のテラスからその様子を眺めていた。

「何か面白いものでも見つけたかい？」

少女が振り返るといつの間に訪れたのか王子が立っていた。

その姿を確認して、少女は再び中庭の人々に視線を向けた。

「ああ・・・見慣れぬ人間が出入りしてすまないね。離宮には必要以上に近づかぬようには言つているが、落ち着かないかい？」

少女は首を振る。

離宮と中庭は離れている上に少女の部屋も最上階にあるので、例え下の人々が目線を上げたとしても少女の姿に気づくことは稀だろう。

庭から視線を外して少女は部屋の中へ戻った。当然王子もついて

来る。

「ユーリアの成人の儀は一月後に決まったよ。儀式のために用意した服がぼろぼろになつたから、作り直しだと気合を入れていた」

「…………」

知つてゐる。

自分のを作り直すついでに何故か少女もセットで作り直すことになつたからだ。

「シェーラが華美なことを好みないは知つてゐるけれど、滅多に無い機会だからね」

どうやら王子に王女を止める気は皆無であるらしく。

ふと少女は再びテラスに視線を向けた。

火の玉がこちらに向かつて飛んでいた。

反射的に少女の腰が少し浮く。

だが火の玉はテラスに届く前に透明な障壁のようなものに当たり、消えうせた。

「シェーラ、部屋を移動しよう」

王子は少しばかり厳しい表情を浮かべていたものの、特に慌てる様子もない。

「…………」

「何かと物騒でいけない。……お前には心穏やかに過ぎ」して欲しいのに

「…………」

「姫様っ！殿下っ！！」

アニーの慌てた様子から先ほどの事態が日常茶飯事では無いことを知らせる。

「殿下がっ！」

「・・・ 私ならここに居るが？」

「違いますっ！その殿下ではなくつ・・・ああ、もうつー。」

何やら取り乱していたアニーは大きく息を吐き出すと、頭を下げた。

「・・・ 王弟殿下です」

「叔父上が何か？」

アニーは少女を憚るよつて口を開じる。

「構わない」

「・・・ 挙兵された、とのことですか」

「挙兵？どこに？」

「自領にて・・現在王都に向かつて進軍中であると」

「・・・なるほど」

王太子は手を閉じて頷くと、少女に微笑んだ。

「心配しなくて良い。すぐに片付けてしまつかい」

その笑顔に背筋が冷えた。

肉親が反旗を翻したといふのに動搖も無い。

「なかなか平穏にとこう訳にはいかないようだ。アニー、暫く留守にするからシーラのことを頼む」

「畏まりました」

「シーラ。お土産は何が良い？』

「・・・」

「叔父上の土地は良い宝石がとれる。シーラにはサファイアが良いかな。それで髪飾りを作らせよう」

肉親との戦いの場に出向くといふのはあまりにも場違いな言葉だった。

そしてモナは國軍五千を率いて出陣した。

国軍5千と反乱軍7千。  
反乱軍には王弟の私兵以外に彼に仕する貴族の私兵が加わっていた。

「・・・数的には不利ですね」

斥候から齎された情報を元に王子の天幕には国軍を率いる主要なメンバーが揃っていた。

王子と副官、国軍三軍と四軍の将とその副官である。

「予想していたことだ」

卓を真ん中に全ての人間が立っている。緊急時にすぐに動けるようだ。

「そつは仰いますが、殿下。数的不利は甘く見てはなりませんぞ」「ファースト将軍。甘く見ているのでは無く、私は皆の力を信じているのだ」

今回率いる三軍と四軍は実力が3番目、4番目という訳ではない。国軍はその数字によつて役割が違うだけで実力は同じだ。劣る者は入ることさえ出来ない。

「人を乗せるのが相変わらず上手いですね」

「スインドラ将軍。国隨一の魔術の使い手である貴方には大いに期待している」

「仰せのままに」

魔術部隊である第四軍を率いる将軍は恭しく王子に頭を下げた。「しかしけしからんつ！ 反乱軍に味方する者がおろうとはつ！」

「腐つても王弟殿下つてことだろ?」

激昂するファイアース将軍をスインドラ将軍がじりじりと宥める。質実剛健、曲がったことが大嫌いなファイアース将軍の大柄な体は怒ると一回り大きく見える。

「そう。叔父上は決して愚か者では無い。全く勝機が無い状況で剣を抜くほどな。ゆえに皆にも苦戦するだらうことは覚悟して貰いたい」

「仰られるまでもなく全力で相手を致しましょう」

「遠慮なく全魔力叩きこんでやりますよ」

王子は一将軍の言葉に微笑んだ。

「頼もしい。一将軍が揃えば私は安心して後ろに控えていられる」「何の我らこそ殿下が控えて下さるからこそ何も背後の憂いなく戦うことができます」

「そうそう。結局『勝てない』なんて一言も仰らないんですからね」

「これから戦に臨むというには明るい雰囲気だつた。

「それでは三軍はこれより陣形を整えますゆえ失礼致します」「よろしく頼む」

「畏まりました」

胸に手をあて頭を下げるトファイアース将軍は颯爽と出て行つた。残つたスインドラ将軍は副官たちを下がらせ、王子と二人きりとなつた。

「殿下。王弟殿下の反逆、何かおかしくないですかね?」「といふと?」

「はつきりした根拠つてのは無いんですが、何かね・・・まあ魔術師の勘つてやつですか」

魔術師といつても国軍に所属する者はある程度の剣の腕も求められる。そのせいかスインドラ将軍も一般に想像する魔術師というよりは剣士に近く、体格も王子に劣らない。剣士と違うのは魔術師の常で赤髪を伸ばしていることか。

「勘か。・・・私もそう思ひ」

「お、そりですか」

「勝機は低いうえ、叔父上に利はほとんど無い。だが向かつてくるものに迷つてゐる暇は無い。・・・注意は怠らぬ」「ですなあ。少々不気味ですよ」

「気をつけることだ」

「御意」

そしてスインドラ将軍も天幕を出て行つた。

「・・・様、姫様つ」

少女の畠の前でアニーが呼びかけていた。

「このようなところでお休みになつては御体に悪いござりますよ」

少女はこくりと頷きソファから立ち上がつた。

アニーの言葉のようになつて少女は眠つていたわけでは無い。遠く意識を飛ばして戦場の様子を伺つていた。

国軍も王弟軍も一触即発。

数的にも地の利もあるのは王弟の側。だが精銳を揃え勇者を擁する国軍の強さはそれを凌駕する。

少女はバルコニーに出ると戦場の方角へ視線を向けた。

「兄上様がご心配ですか？」

アニーの問いかけに首を振つた。

「まあ。姫様は兄上様を信頼なさつてゐるのですね。そうですわ。

殿下はかの魔王さえ倒された当代随一の騎士なのですから」

少女の小さな手がぎゅっと握り締められた。

『サラ』

『だからっ！沙耶だつて……せ・やー。』

『だから。サラであろう？』

『……リンのバーカつ……』

「お前が魔を呼ぶ姫か？」

呼びかけに視線を下ろせば一人の男が立っていた。

近しい者しか近づけないはずの離宮で、男は見慣れた兵士の格好ですらない。

少女は特に何の反応もかえさず男を見下ろしていたが、階下の手すりに手をかけるとそのまま垂直に飛び上った。

そして少女の目の前に居た。

かなりの高所を脚力だけで飛び上ると、尋常ではない。

「見事な魔の色だな」

頤をつかまれまじまじと田を覗き込まれる。ゆえに男の真っ赤な瞳もよく見えた。

「姫様っ！……誰ぞっ！曲者がっ……」

アニーが叫び、静かな離宮が一瞬のうちに喧騒に包まる。

「痴れ者がっ！」

短刀をかざしてアニーが突っ込んでくる。

「勇猛だな、侍女殿」

男は容易くアニーの手首を掴み、短刀を奪う。

「くつ・・・姫様つ・お早くつお逃げ下わこつ・・・」

「その必要は無い」

「失礼しますつ・・・曲者とははつ・・・・・?」

離宮の警護に当たつていた兵士たちが部屋に突入してくる。

そこで手首を男に拘束された侍女と、無表情で佇む少女を視界に

入れる。

「早くつ・・・」の者を取り押さえなせこつ・・・・・・

「え、いや・・・・」

アニーの叫びに何故か兵士たちは困惑のよつたな視線を向ける。

「何をしているのですつ・・・・」

「だからその必要は無いと言つてはいるだりつ、侍女殿

「・・・・・」

アニーは叫ぶのをやめ、男を見上げる。

「・・・何者です?」

「申し遅れたが、殿下よつての離宮の警護を命じられた第六軍が将ラスカーだ」

「・・・將、軍・・・?」

呆然と呟くアニーに頷くとラスカーと名乗った男は拘束していた腕を解き、少女の前に膝をついた。

「初めてお目にかかります、姫君。これより御身をお守りする者、見知り置き下わい」

やはり無反応な少女に構うことなくラスカーは小さな手をとると甲に口づけた。



今日も今日とて離宮の一室からアーネの怒声が響いていた。

「ラスカー将軍！いい加減にして下さこませつ！！！」

当の將軍は少女の目の前でのんびりとお茶を飲んでいる。  
離宮の警護を王子に命じられたという將軍は少女の前に現れて以來、特に仕事らしい仕事もせず昼過ぎ頃に現れてはのんびりと過ごして帰っていくを繰り返していた。

最初こそ我慢していたアーネだつたがついに堪忍袋の緒が切れたらしい。

「貴方の職務はいったい何なのでですか！？」

「それは無論、この離宮の警護。つまり姫君をお守りすること心得ておりますが？」

「貴方の警護というのは姫様のもとを訪れ茶を飲むことですか！？」

「・・・ふむ。まあそれも警護の一環でしそう」

激昂するアーネと対照的にラスカー將軍は飄々としている。

それがまた怒りを煽る原因なのが。

「姫君は退屈では無いかい？一日中どこに行くでもなし、この離宮で過ごして・・・まるで籠の鳥」

「・・・姫様はっ！」

少女は静かに外へと視線をやつた。

戦場から離れたこの離宮ではその喧騒も血の匂いも流れでは来ない。

今どのような状況になつてているのか・・・この將軍が毎日訪れるので確認が出来ない。

「イルシオン殿下が」心配ですか？」

問われ、少女は首を振る。

「姫君は兄上様を信じていらっしゃいますからー。」

「魔王を倒した勇者殿下ですからね。国ー・・・否、世界ーと言つても良い強さでしそうな。確かに心配などされずともすぐに戻つて参られるでしょう。では、どうです姫君。庭の散策でもいたしませんか？」

「外は・・・」

少女は頷いた。

「姫様っ！？」

ラスカー将軍は微笑を浮かべると手を差し出した。

「それでは姫君。御手をどうぞ」

ちらりと差し出された手を見た少女は、その手をとることなく部屋の入口へ向かった。

ラスカー将軍は苦笑を浮かべてその後に続く。

アニーも負けてなるものかと早足で少女を追いかける。

少女が庭に出る時には、王子か王女が必ず付き添っていた。

「姫様。日差しがまだ強うござりますから帽子を被つて下さいませ」

王子に始まり、王女・アニーと非常に少女に過保護である。

「」ひついう機会でも無ければ、この見事な中庭を見ることがどうは出来ませんからね」

「不謹慎ですよ、将軍」

子供を囁めるようにアニーが眉を顰めた。

戦場には雨が降っていた。

初戦をフィアース将軍率いる4千の兵で打ち破った国軍は、籠城した王弟派を囲んでいた。

籠城戦といえば長期戦となるのは必至。

「・・・面倒だな」

「はあ。 そう仰る気持ちもわからんでは無いですがなあ」

「しかし相手は長期戦を覚悟しておりましょ。正面から攻めてもなかなか難しいかと」

スインドラ将軍ばかりかフィアース将軍も如何ともし難いという意見だった。

「叔父上の軍に魔術師はどれほど居た?」

「温存でもしておれば別でしそうが、10分の1もおりませんでしょ」

魔術の素養を持つ者は珍しくは無いが、それが戦闘できる域にまで高められる者は稀だ。

王子はそれを聞き、頷いた。

「スインドラ将軍。私が城門を破壊する。そこへありつたけの攻撃魔術を放つて欲しい」

「・・・力技ですか」

城には大抵魔術によって結界が張られている。ちょっとした攻撃魔術ならば無効に出来るような。

それを王子は破壊すると言つてゐるのだ。

「無理だと思うかい?」

「いや、出来るんでしょ」

圧倒的な火力を誇る魔術師軍団を率いるスインドラ将軍にさえ王子の魔力の上限がどこにあるのかわからない。

「問題ない。ファース将軍には私たちのカバーを頼みたい」

「畏まりました」

「叔父上の身柄は必ず確保するよ」

「はっ」

何故、今この時に反逆するような行動に出たのか。  
行動するのならば王子が魔王討伐に赴いていた時こそ絶好の機会  
だったということのこと。

「では、一時間後に

雨脚は徐々に弱くなりつつあった。

ありえない・・・そんな思いで兵士たちは城壁の名残.. もはや瓦礫としか言いようの無い場所を見た。

王子が大規模攻撃魔法を使用するといつことで、兵士たちは一旦  
退いた。

その様子に王弟軍は警戒しながら追撃はかけてこない。  
「殿下。第三軍撤退完了いたしました」

「わかった」

王子は頷くと、腰の剣を抜き前方の城に向けた。  
勇者の剣はビリビリと帶電し、周囲に誰も近づけない。  
その剣を王子はいつそ無造作にも思える動作で城門へ向けて振つ  
た。

その直後凄まじい雷鳴と爆発と、雨上がりの薄暗さを吹き飛ばす  
ような鮮烈な光が辺りを覆つた。

誰もが反射的に目と耳を覆う。

魔力の余波が肌を撫ぜ、総毛だつ。

光が收まり、田を開けたその光景に味方の兵士たちも言葉を失つたのだ。

「殿下。聊かやり過ぎじゃないですかね?」

「そうか?」

スインドラ将軍が口元を引き攣らせながら王子を伺つ。

「あの状態では、追撃の魔法なんて必要無いでしょ?」

城門といわば、城の半分が抉れている。

居たはずの敵兵士の姿も無い・・・今まで吹き飛ばされたか、消し去られたか。

「そうだな。ファイアース将軍」

「はっ」

「兵を率いて叔父上の身柄を押さえよ。抵抗する者も少ないだろ?」「畏まりました」

今の攻撃を見て更に抵抗する人間は愚か者か自殺志願者だ。

「王弟殿下、巻き込まれて無いといいですなあ・・・」

少しばかり哀れみをこめてスインドラ将軍が呟いた。

どうやら王子が戻ってきたらしい。

離宮は相変わらず静けさに包まれているが、流れてくる空気が騒がしい。

「私も本日でお役御免です、姫様。楽しかったので、残念ですね」「……」

離宮に来て、茶を飲んで、一人話して、時折アニーの一喝を受けながら。

給料泥棒と言われても無理の無い生活をラスカー将軍は送っていた。

「惜しむらくは姫様の笑顔を賜れなかつたことですね。お笑いになると大層お可愛らしいでしょうに。もちろん、今までも十分に愛らしいですよ」

浮ついた物言ひはそれが本気か社交辞令なのかすぐには判断できない。

「疑つていらつしゃいますね？」

「……」

無言の少女の前にラスカー将軍は膝をついた。

そうすると身長差があるために丁度ラスカー将軍の赤い目と合わせる位置となる。

初対面の時を彷彿とさせる立ち位置だ。

「姫君。貴方さえ私の手を取つて下さるのならば、喜んで私はその身を捧げましよう」

ラスカー将軍は笑みを消し、真剣な表情で少女を見つめた。

王族でも無い、確かな身元も後ろ盾えない少女に何故そこまで下手に出るのか。

何が狙いなのか。

「その憂いに満ちた瞳。……その中に隠された闇は誰に向けられているのですか？」

少女は緩慢な動作で取られていた手を払おうとした。

しかしラスカー将軍は放さなかつた。

「教えていただけませんか？」

少女は小さく息をつくと、座っていた椅子から立ち上がり部屋の外の廊下へと続く扉へと向かつた。

そして扉の前に立つと、何をするのかと見つめていた将軍を振り返り扉を開けた。

「・・・酷い方だ」

出て行けという少女の無言の言葉を正しく理解した将軍は立ち上がった。

群青色の、黒に近い濃い色の髪を持つ男は貧乏貴族の出で、実力でここまでのし上がってきました。

柔らかな物腰で貴族の令嬢には人気が高いといふ。だが。

初対面のときに見せた男の姿こそが眞実。  
取り込んで上手く使うという手もあつただろう。  
しかし確実性を狙うのならば、不確定要素は少なければ少ないほうが良い。

優しさなど。慰めなど。・・・憩いなど。

不要なのだ。

「闇の姫。殿下には気をつけろ」

去つて行くラスカー将軍が、入れ替わるように歩いてくる王子に頭を下げる立ち止まる。

王子は何か一言二言告げると小さく頷きラスカー将軍は今度こそ

少女の視界から消えた。

そして、王子が少女の姿を見て笑みを浮かべる。

「ただいま、シェーラ」

その日、魔界は朝から妙に騒々しかつた。

「勇者一行が・・・」

「ああ、またか。人間も憲りないな  
すれ違う魔族がそんな会話を交わしていた。

どうやら世のセオリー通り魔王が居れば勇者も居て、当然ながら  
魔王討伐にやつて来るらしい。

・・・しかし討伐する必要なんてあるのだろうか？

そりやあ人間苦しめてるとか、魔王が居るから魔物が跋扈してい  
るとか言つならわかるけど・・・

「特に何もしてないよね？」

「何だ？」

問いかけると魔王が首をかしげた。魔王は「まあう「まおう」さんという  
名前ではなく役職でした。

初めこそびびったが、魔王は特に何をするでもなく異世界迷子で  
ある自分をここに置いてくれた。

『出て行くなり、元の世界に戻るなり好きにしろ』と。

うん、それが好きにできるならこんなところに居ないと思つよ。  
それ以来元に戻る方法を探しながら魔界で過ごしているわけ。  
そして魔王は無愛想ではあつたが、付き合ひは良かつた。

勇者がやつて来るといつのに、いつして付き合つてくれてるし。

「ほら、勇者さん？が来るんでしょ」

「・・・ああ」

それだけかい。

「子どもが気にすることでは無い。むしろお前は人間なのだから丁度良いのでは無いか?」

「わたしのことじやなくて、だつて濡れ衣でしょ?」

身長が低いので、執務机の上に首だけ出して魔王に言ひつ。

「難しい言葉を知つてゐる」

・・・どこまで子ども扱いだ。

「仕方あるまい。人は魔という存在そのものに嫌悪感を抱くようにな造られた。弱き口の身を守るために。謂わば生存本能と言い換えても良い」

「へえ・・・」

そう言わると仕方ない、のかな。

「でもそれならなおさら、魔族に手を出したりしないんじやない?」「人も一律ではない。弱いからこそ恐怖を抱く。ならばその対象を消してしまえば良い」

随分と身勝手な言い分だ。

「そういうの・・・嫌い」

魔王が苦笑した。

無愛想だけど、魔王はとつても・・・

「人が生まれし時からの宿命。やだめ神の悪戯は悪辣だ」

「神様嫌い」

宥めるように魔王の手が頭を撫でた。

「一種のイベントだと思えば良い。これが済めば当分勇者とやらも現れぬだろう・・・確かに来たのが300年ほど前であつたか」  
ちなみに魔王、貴方何歳ですか?

そう、愚かな私は魔王の言葉を信じた。



穏やかな日々が戻ってきた。

「シーラ。お土産だよ」

反乱軍討伐から戻ってきた王子は少女の元に土産を持参した。  
渡された小箱をシーラはちらりと見る。

「開けてごらん」

そう言われ、少女は箱を開ける。中には緑の石がついた髪飾りが入っていた。

「シーラの黒髪に映えると思つて、つい手にしてしまったよ」「つけてあげよう」と王子はその髪飾りを少女の髪にそっと挿した。

「ああ、いいね。似合つよ」

「・・・お兄様。私には無いのかしら?」

少女の隣に座っていた王女が訴える。

「もちろん。お前にもあるよ・・・だが髪飾りより実用性のあるものが良いだろ?」

きらりと王女の目が輝いた。

「お兄様!」

「ああ、先日の魔族との戦いで剣が駄目になつただろう?部屋に届けさせたから後で確認するといい」

「ありがとう お兄様!」

抱きつかんばかりに王女は喜んだ。

「延期になつていた成人の儀も一月後と決まつたことだし、もう少

し淑女らしくして貰いたいと皆思つてゐるのだけれどねえ」

「あら、それはお姉さまにお任せしていますもの。私はドレスや扇より剣を持つほうが性に合つてゐるのですわ」

男女問わず文武両道のお国柄。王女の有様に眉を潜める者も少數だ。

「ショーラも勇ましい私が好きよね？」

少女は少し間を開けた後、首を縦に振つた。

「・・・嫁の貰い手が心配だ」

「あら、私よりお兄様のほうが先ですわ」

「そこで悪戯っぽい笑みを王子に向けた。

「シャデイルアよりお見合の話が舞い込んでゐること存じ上げておりますよ」

「・・・どこで聞きつけてくるのだか」

「ふふ、ついにお兄様もご結婚ですかしら。シャデイルアのサピエンサ王女は聰明な方で諸国に名を知らしめていらっしゃる方。お会いするのが楽しみです・・・ああ、どうぞ心配ならないで、お兄様。ショーラのことは私がしっかりとサポート致しますわ」

「ねえー」と少女に同意を求めてくる。

「そう先走らないでおくれ。サピエンサ王女は確かにいらっしゃることになつてゐるが、外交でいらっしゃるのだから」

「そういうことにしておいてさしあげますわ。ショーラはシャデイルアという国を知つていて?」

少女は首を振つた。

「シャデイルアは優秀な癒し手を多く輩出しているの。その中でもサピエンス王女は特に力の強さで有名で、少し大げさだと思つけれど死人さえも生き返らせると言われているわ」

その言葉に少女の肩がぴくりと揺れた。

「さすがに本当に死人を生き返らせることは出来ないだろうけれどね。ショーラも王女に興味があるかい?」

少女はじつと王子を見つめた。

王女は外交で来訪するといつ。通所そんな相手に少女は顔をあわせない。

「そうね、未来のお義姉様におなりになるかもしねないですし」

「コーリア・・・」

ふふふ、と王女が笑う。

「きっとアルカーナの王女よりずっと素敵なお方よ。だから安心してどうやらリリアーナ王女を仇敵認定したらしい。」

「リリアーナ王女と意気投合していたように見えたけれど？」

「冗談ではありませんわーーあのよう口先だけの方と一緒にしないで下せこませー！」

憤懣やるかたないと腰に手を当てる王女に王子は苦笑した。

少女は思つ。

死人さえも生き返らせる・・・それはどんな奇跡だろうか、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2888w/>

---

ジハード

2011年10月10日03時23分発行